

岡田よしたか

「絵本作家になったいきさつをちょっと……」

大阪で生まれて、愛知県立芸術大学の油画科を卒業。大阪の無認可保育所で保父さんをしながら、個展やグループ展に出品していました。

40歳の時、東京でのグループ展に参加せえへんか、と言われた。

当時『全日本オールヌードマラソン』という大人の世界を描いておりまして、

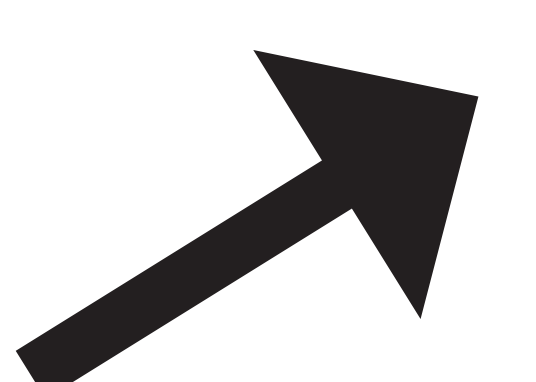
サウナで全裸の人同士が喧嘩しているとか、ばっかりの連作で、画集も3冊出してるんですけど。誘った人が「おもしろいからこれを出せよ」と。

グループ展は、井上洋介さん、片山健さん、スズキコージさんといった大物絵本作家さんたちも出展したことがあって、出版社の人たちが見に来ます。それで、福音館書店の編集者が、僕に「こども向けのをどうですか」と声をかけてくれた。

(出品作を見ながら)「これをやってほしいとは言ってません」とも・笑。

当時、福音館書店から出ていた小学生向けの月刊誌『おおきなポケット』に描く機会をもらいました。その直後、同じ出版社の、今度は絵本単行本の担当者から声がかかり『おーいペンギンさーん』を初出版しました。

それまでとりたてて絵本に関心はなかったけど。保育所の仕事をするようになって、その中で絵本に接して、こういうのおもしろいなと思った。でも、自分でやろうとは思っていなかった。自分にはできないと思っていたから。



認可外の小さな保育所でね。補助金とか全然ないので、結局のところ財政的に立ち行かなくなって閉鎖したんですね。

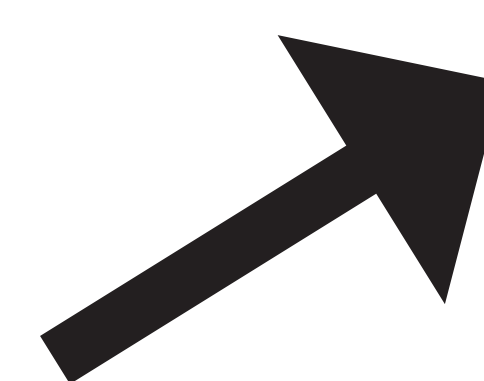
その後結婚して、奈良へ来ました。うちの奥さんは大和郡山出身なんですけど、最初ね「田舎の方に住みたい」て彼女が言うので。大柳生のちょっと向こうのほうの家に住みました。

僕は、奈良で仕事を探さなあかんようになって。いろいろ考えてた時に、たまたまドリームランドの求人チラシに販売係のアルバイト募集とか、出たんですよ。その時「看板描きの仕事なんかあるんちゃうかな」と思って電話した。

電話口に出た人に「デザインもできますかね？」と聞かれて、したことないけど「できますよ」って。そしたら電話口の人が、その向こうにいる人に「できる言うてまっせ」て。「ほな、一応来てもらいましょう」と。

ドリームランドでは「メンテナンス課」というところに配属されました。

園内保守ですね。塗装とか。大工仕事の補助とか。イベントの時には「ちょっとこれ描いてくれ」て言われたり。そういうの、外に発注してたらめっちゃ高いと思うねん。中のアルバイトに時給 800 円でやらした方が、そらええですわね。



※奈良ドリームランド

奈良市北部にあった遊園地。千土地興業（のち日本ドリーム観光）により 1961 年に開業。奈良を代表する遊園地として人気を集めたが、2006 年閉園。余談だが、千土地興業の代表 松尾國三（1899-1984）は旅役者から立身出世して興行界やレジャー産業で幅広く活躍。「昭和の興行師」「芸能界の黒い太陽」の異名をもつ人物。

ドリームランドが閉園する直前に『特急おべんとう号』が出たんです。

で、ドリームランドの仕事なくなっても、次の仕事探さんでも筆一本でいけるやろと。描く時は三本か四本使いますけどね。

とまあ、自分で納得したわけです。

最初の『おーいペンギンさーん』から『特急おべんとう号』が出るまで、何年か空いてるんです。その間、自分で一生懸命話を考えて、編集者に見せてんねんけど、3本ぐらいボツになったんです。なかなか厳しいもんやなと。

ーボツになった作品、今思い返して、どうですか？

悪くはないと思うねんけど、もう一步踏み込んだらよかったかなーとも。

でも、キツネが出てくる絵童話みたいな長い話を、十数年前に、とある編集部に渡したらえらい気に入られて。「ちょっとこれ本にしたいなあ」言われててんけど。ずっとそのままになっていた。

でも昨年、「出版したいなと思ってるんです」で、出版社の社長から連絡が入って。そんなこともある。

ーということは、キツネのお話が今年出版される!?

いや、今年は予定すでにいっぱい。

3冊描かなあかんねんけど、それが非常にきついスケジュールで。